

C-55 被服構成のための衣服圧測定法 (その2)

広島女大家政 小池美枝子・杉本茂子

目的；被服構成のフィット性の適否は、材質に適したゆとり量の設定が重要なファクターとなる。このゆとり量を測定し被服の着用感を数量的に把握するために、衣服圧測定法の利用を試みた。今回は基礎的研究として測定機器の比較を中心とし、抗束時の測定方法を検討したので、その結果を報告する。

方法；(1)使用した測定機器は、ゴム袋(5×4 cm)を接続した斜面水銀圧計、半導体小型荷重変換器、前回報告したストレンゲージ小型受圧器の3種である。(2)被検者は女子学生6名(20~21才)である。(3)測定部位は右上肢で肘関節屈曲時の上腕二頭筋の膨隆上で尺側巾径の中央点とし、姿勢は椅座位で上肢を机におく。(4)測定時は午前10時前後と午後3時前後である。(5)加圧方法は血圧計を用いて測定回数5回の平均値を比較する。

結果；(1)同一被検者において午前と午後の測定時で測定値に差がみられる。(2)加圧に対して3種の測定機器とも直線性であるが、測定値の最大はストレンゲージ法で、つぎが半導体小型荷重変換器によるもの、最小が水銀圧計による測定値である。水銀圧計は加圧量の限界がみられるが、他の2種はかなりの加圧量の測定が可能である。以上の結果は6名の被検者に同一傾向である。しかし6名の測定値は測定部位の弾性差により、かなりの個人差がみられる。衣服圧測定法には体部の弾性の測定法を開発し、加味して検討する必要がある。